

## 大学図書館における場としての利用状況の変化と取り組み

井 規子

近年の情報機器の発達や国際化などにより、大学生に求められる能力は変わりつつある。それに伴い大学生には主体的に学ぶ学習が求められるようになった。そのため大学図書館は主体的な学習を促す「場としての役割」を求められるようになってきている。その要請に応えるように多くの大学図書館は開館時間を延ばす、閲覧座席を増やす、ラーニングコモンズを設置するなどの取り組みを行ってきている。しかしそれらの取り組みが利用状況にどのような変化をもたらしたかは明らかになっておらず、「場としての役割」を果たすためにどのような取り組みがより有効かもわかっていない。そのため本研究では、場としての利用者の数を考慮したうえで入館者数と総貸出冊数を用いて大学図書館の利用状況がどのように変化してきたか示す指標を作成し、その妥当性を検証するとともに実際にその値の変化状況を見た。指標の検証および指標値を求める際には、『日本の図書館 統計と名簿』及び各大学図書館が年報やホームページにおいて掲載してある値を用いた。またその変化を各大学の沿革に照らし合わせることでどの取り組みが「場としての役割」を果たすうえでより有効であったかを調べた。さらには、「場としての図書館」を考える上で近年注目されているラーニングコモンズを設置した大学図書館においてラーニングコモンズ設置の前後で指標値がどのように変化したかを調べた。

場としての利用状況を示す指標については、貸出人数をもとに妥当性を確認した。指標値の変化と、場としての役割に関わる取り組み状況を照らし合わせてみた結果、開館日の増加、開館時間の延長、電子機器の貸出、グループ学習エリアと個人学習エリアの分離、無線 LAN の設置において場としての利用が増えた事例が多いことが確認された。取り組み以外で利用状況を変化させる要因としては、図書の利用制限や工事などによる大学図書館の利用制限が見られ、それらは場としての利用を減らす事例が多かった。また場としての図書館として重視されているラーニングコモンズを実施している大学図書館であっても、場としての利用が増えた大学図書館とそうでない大学図書館が見られた。ラーニングコモンズの取り組みの中で場としての利用を促しているものとしては可動式の机椅子の設置があり、一方影響がほとんど見られないものとしてチューター制度の導入があった。チューター制度を導入する際はその方法とあり方をよく吟味する必要がある。

本研究で提案する指標により、場としての役割に有効な取り組みのいくつかを明らかにすることができた。しかし、同じような取り組みをしても、同じような利用状況の変化が起きない場合があることも明らかになった。これは大学図書館の個別の事情や、大学図書館周辺の環境が影響していると考えられる。そのため場としての利用を増やすためには各大学図書館が学生のニーズに合った取り組みを考え実行する必要がある。

(指導教員 真栄城哲也)